

モンスターハンターイ  
グラー 兵器たちの記  
録

5 9 7 8

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この兵器はモンスターハンターの世界における時代のあだ花となった兵器群の最後の活躍をつづった男の記録である・・・

# 目次

空をかける巨人が背負ったもの	1
雷槌は砂漠に吠える	25
海獣の槍は災いの渦を砕いた	42
約束を抱いた英雄の槍は呪いの砦を穿 つ。	58



## 空をかける巨人が背負ったもの

私がヘカトンケイルの運用試験に携わることをはじめた日は大都市マンテで滅龍砲の使用よりも数年前のことだ。私個人としてもヘカトンケイルは滅龍砲に代わる対飛竜兵器として期待していた。この兵器が建造し評価されるようになれば危険かつ生態系を破壊しかねない滅龍砲を使わなくてすみそうだと信じていた。しかし、調査開始より少し前日に判明したことだが、この兵器は試験運用すらされずに解体される予定だったものだ。この兵器の運用試験は各種搭載兵装はあくまでも試験飛行のみにとどまっていた。ヘカトンケイルをいきなり実戦投入することになった原因は皮肉なことだ。建造完了から約一週間ほど後に使用された滅龍砲によるものだった。現地のハンターたちの尽力により、マンテ町の滅亡という最悪の事態は回避できたが、集まったりオレウスはほとんどがもとのいた縄張りに戻ろうとしていた。だが、

マンテ町に押し寄せたりオレウスには多くの市民がいる市街地を通りすぎる個体も十数匹ほどいると予測された。

リオレウスの大群を迎撃するためにハンターが迎撃に向かうなか、艦長をはじめとす

る乗組員たちはヘカトンケイルともに先制迎撃に出向くことになった。だが、ヘカトンケイルは古龍を迎撃するための要塞に匹敵する火力を持ちながらも、リオレウスの機敏な動きに対しては不利と言わざるを得なかった。それ故、非常に素早いリオレウスに挑むことは無謀の極みとも言えた。それでも、ヘカトンケイルは、戦い抜いたのだ。男たちの思いを背負って。男たちと共に居続けていたのだ。

二年前の、季節は厳しい冬も峠を越えて温かい春命も活力を取り戻していく初春の晴れたある日に私は造船業都市 a を訪れ、ヘカトンケイルの運用試験に携わるべく宿泊の手続きなどの用意を進めていた。

今回の調査対象にして史上最強最大の飛行船それがこのヘカトンケイルだった。

これからは、ヘカトンケイルの実践報告

調査の開始から1年と4ヶ月が経過した頃だった。ヘカトンケイルはついに完成され

本日から私はこのヘカトンケイルの戦闘力、実用性、機能性を多角的に評価し、今後の開発に役立てたいと思っている。

まずは機装を調べるため、宿を出た私はヘカトンケイルが格納されている格納庫を訪

れた。格納庫のなかにはヘカトンケイルの主砲として搭載される予定の353mm砲の徹甲榴弾が運搬されてヘカトンケイルに積み込まれている。

「慎重に運べよ！信管はまだ込めていないが少しの損傷が命取りだ！」

乗組員が部下たちに大きな声で年押しした。聞いているだけでと緊迫感がわいてくる。

他の場所では飛竜種の甲殻を複数種類組み合わせ作り上げた甲殻を溶接によって接合することで、複数の飛竜種の甲殻の短所をカバーしあっている。

「よく来たな。俺がこのヘカトンケイルの艦長だ。」

壮年で筋骨隆々とした男性が声をかけたこの戦艦ヘカトンケイルの艦長だ。

私はピシッと姿勢を引き締め直し挨拶をした。

「はい！よろしくお願ひいたします！」

それじゃあまずは　といくか。

本日の調査は新鮮な体験がたくさんあった。

私は宿で一息ついてから今回のレポートをかきはじめた。宿の従業員が呼び鈴を鳴らし私を呼んだ。どうやら私を呼んでいる人がこの宿を訪れたようだ。訪れた方は三十代ほどの女性で艦長の妻であるようだ。

「はじめまして。私はあの艦、ヘカトンケイルの艦長の妻だったものです。」

「妻だったもの…… ですか？」

「はい。私の夫は私をいつも思いやってくれる人でした。」

「それでは、艦長の方から……」

「いえ、私自身が切り出したのです。たしかに、寂しくはありますが、あの人には、夢を追い続けてほしいのです。私のために夢を諦めたとなると、やはり……」

私は手紙の封筒を切り、伝達に目を通した。その直後、自らの目を疑った。あるいは嘘であつてほしいと思つただろう。内容は飛行演習のみだつたはずのヘカトンケイルを戦闘に参加させるというものだった。

ギルドもハンターを募っているが、一頭だけでも十分すぎるほどの驚異であるリオレウスを一度に数えきれないほど 相手にしなくてはならないため 大勢のハンターは二の足を踏み、断つたものは少ないとは言えなかつた。無理もない話だと私は思う。ただでさえ強力なりオレウスが気が立っている上で数えきれないほどに集結しているのだから。もちろん協力を打診してくれたハンターもすくなくならずいたのだが、現地にくぐたどり着けるハンターは限られていた。戦力は圧倒的に不足していたためか、少しでも戦力の足しとするためにヘカトンケイルもいきなり実戦に駆り出されることになつた。しかしながら、砲撃に巻き込む危険性がある以上ハンターたちと連携して行動することはまず不可能であつた。そのため、ヘカトンケイルのみで、先攻兼陽動あるいはそ



の輸送能力をいかして人員及び資材の輸送のいずれかを行うよう提案された。艦長の決断によりヘカトンケイル陽動と先攻を同時に行う任務につくことでこの作戦に参加することとなったが、私は反対だった。

単艦でリオレウスの大群と戦うことは無謀の極みとも言えた。それでもヘカトンケイルの出航を推進した者たちの真意はわからない。

「艦長。私はこれから、ヘカトンケイルの運用を物資と人員の輸送を中心の後方支援にするよう本部へと進言していきます。ヘカトンケイルによる陽動作戦に懐疑的な者もいますから、作戦の変更は難しくはないはずですよ。」

艦長の目はいつそう鋭くなった。

「それは死にいく俺たちを死なせないようにしてやりたいという同情からかい？ヘカトンケイルの火力は複数の飛竜種にだって十分だってお墨付きをもらったはずだぞ。」

私は反論した。

「砲火力は十分だったとしても、正直素早く飛び回るリオレウスに挑むことは得策ではないかと……なにより空中戦艦は本来陸上モンスターあるいは水上ないし水中のモンスターを攻撃するために開発されたため、本来はこの任務には不向きです……」

「俺たちがどれだけリオレウスと対峙してきたと思つてやがる。どうつてことはねえ。」

彼らは投げやりで戦いに赴いているわけではない。明確な信念のもとに戦っている

のである。それはわかっている。だが、

乗組員たちの帰りを願う人々もいるはずだ。彼らの顔がより強く鮮明に思い浮かんでいてついに私は耐えられなくて叫んだ。

「いくらなんでも無謀すぎます！ 十分な護衛もないのに、お互いに争い合うほどに極端に興奮している無数のリオレウスと戦うなんて！ 死にいくようなものだ！」

叫んだあとに、我にかえった私は荒くなった気分を落ち着かせゆつくりと呼吸した。

艦長は怒号をあげるわけでもなく私を殴り付けるわけでもなく、どこか武骨な雰囲気ながらも静かに、だが明確な信念がこもった

「なあ、技術屋の兄さん。俺たちは死ぬことが目的でこいつの錨を抜くわけじゃねえ。本当に生き抜くためになんだよ。」

「どういうことですか？」

「あんただってここを訪れていて気づいていただろ。右を向いても左を向いても、俺と同じく腕やら足やらをなくなっている奴ばっかりだと。そいつらは元々は真正正銘の狩人だったんだ。」

艦長は続ける。

「このヘカトンケイルはな、希望だったんだよ。俺達のように狩人失格の烙印を押され

ても、あるいはそもそも狩人にすらなれなかったのに狩人を諦めきれねえで狩人根性を煮えたぎらせている、狩人以外の生き方をまともに考えられねえバカどものな。」

「希望：．．． ですか。」

「そうさ。俺たちは死んでるようにこれから何十年もだらだらと生き続けるより悔いが残らねえように最後まで夢の炎を燃え上がらせてえんだ。例えばその炎がすぐに燃え付きちまうもんでもな。」

艦長は葉巻に火を着けて一服したあとに続ける。

「それに、こいつには俺たちに夢を叶える希望をみせてくれたんだ。その借りをかえしてえ。」

「夢を叶える希望：．．． ですか：．．．」

「ああ。こいつが完成すれば世界のどこからどこまでいくかも自由だとか、こいつが完成すれば再び狩場に戻れるだとかそれぞれにいろんな夢を持っていたよ。そして、建造は不可能として設計段階で中止になったこいつが技術の進歩で本当に建造できるようになったことでもしかしたら俺たちの夢もまだ叶えられるかも知れねえっておもえるようになったよ。」

相槌すら打てない私の心境を悟っていたからか、艦長は続ける。

「世間ではこいつで、このヘカトンケイルがモンスターを倒すなんて叶わない夢と抜か

しやがる。だからこそ挑むんだよ。世間のやつらを見返してやりたいという気持ちよりも世間のやつらが無理と決めつけた夢を叶えてやりたい。」

「それは… 他のクルーも同じことなのではないですか？」

「そうじゃなかったらヘカトンケイルにのっちやいねえさ。全員おんなじことを考えていることを確認済みだ。それに…」

艦長は今では義足となつて右足に目をやる

「足や腕を失つた連中が空を飛ぶ船でモンスターを薙ぎ倒すなんて物語があれば、きつとたくさんさんの夢を燻らせているばかどもの希望になれるかもしれない。」

「希望… ですか…」

語気からひしひしと思入れがつつたわってくる。

「ああ、そうさ。さつきも話した通り、この船の乗組員はみんな一度は狩人としての生き方を失いかけた。そこにヘカトンケイルが狩人として再び生きるチャンスくれたんだよ。」

正直まだ理解できないところも多い。

私も艦長が抱えている思いの果てにあるものを見てみたいと感じた。

「僕も乗せていってください。」

艦長は眼を細めた。

「これは見せもんじゃねえぞ。野次馬根性で乗り込むってんならお断りだ。おもりをする暇なやつなんていやしねえ。」

艦長はつき放つようにいつてのけたが、

「足手まといにはならないように、努めます。僕は見届けるために派遣されたのですから。」

「明日の午前八時にここに来い。」

艦長は少しため息を着きながらもそれ以上はなにも言わなかった。艦長は乗船を許可してくれた。艦長に報いるために足手まといにはなつてはいけない。何よりこれから先待ち受ける事実がなんであれ、必ず後世に受け継がれていくようにする。使命感や義務感ではない。ましてやヘカトンケイルに乗り込むことを決めた男達への憐れみでもない。ただ、うまくは言い表せられないが、この戦いを最後まで見届けたい。少しでも彼らの思いを理解できるようにになりたい。そして誰かに伝えたい。彼らの戦いを。ヘカトンケイルの戦いとヘカトンケイルに詰められた思いを。そう思った私はまず彼らの話を聞いてみようと思ひ、この宴を楽しむことにした。

ガヤガヤと喧騒があちこちから聞こえてくるが、話題は

やはり明日の戦いだった。ハンターたちは命のやり取りをする度に終えたあとには

こうやって飲みあかし、大笑いをするようだ。

「いよう！のんでるかあ？技術屋だっけ？記者だっけ？

機嫌よく乗組員の一人が問いかけた。

「はい。おかげさまで。私はヘカトンケイルの性能を調査し、今後の技術開発に役立てることを目的にギルドから派遣されてきました。」

私は質問に答え、小さい樽のジョッキにビールをついでもらった。

艦長とのといかけの部分に以下の文をうつ

その日の夜宴は幕を閉じた。通常の宴に比べてお酒の量は少なかった。建前上は二日酔いにならないようにするためだったが、おそらくはほかにも理由があるからだろう。それを聞いたただす勇氣も、仮に返答がかえってきててもその問いに対する返答が事実であると確信できるすべも私は持ち合わせていなかった。

決戦の朝。天気は晴れており、雨や風といったアクシデントの原因となりそうな要素はなかった。まるで天がこのヘカトンケイルのために用意したかのように思えた。

がやがやとした声があちらこちらで聞こえる。

乗組員にも家族はいると思うが、見送る者は見られなかった。艦長にその事を問おうと思ったが出来なかった。訪ねることは、何かを侮辱するような気がしたからだ。察

するに乗組員の方々の戦意を削ぎたくないからなのだろう。もちろんこの推測は私の憶測でしかない。

朝の日差しを浴びながらヘカトンケイルは錨をあげた。

燃石炭などを点火の起点とする焼き玉式のエンジンがかかり、ヘカトンケイルに備わるあちこちの回転翼がだんだんと加速を着けて回転しはじめて、まもないうちに十分なほどの速度にまで達した。

「浮揚用の回転翼、必要な回転速度に到達しました！離陸できますす！」

「錘を切り離せ！いよいよヘカトンケイル抜錨だ！総員気を引き締めて作業に当たれ！」

艦長の号令と共に固定用のロープと碇が切り離されてついに離陸が開始される。ヤマツカミの浮遊方法を参考にして備えられた浮遊用ガスによりもたらされる浮力がロープと碇から解放されたことで宙へとうかびあがり、回転翼によってヘカトンケイルは全速前進を開始した。

あちこちで乗組員達の関の声が響き渡る。艦長の言葉を借りるなら、これまでにくすぶつていた感情が爆発したという様を表現していた。エレベーターで上昇するように体が浮くような感覚によって私でもこの船が空へと飛び立つというついに男達の思

いが集まったこの船が動きだし、戦場へと駆け出したのだ。

好奇心にかられてヘカトンケイルの窓から景色を見下ろしてみるとまさしく絶景とも言える光景が私の目に映った。子供じみた気分に戻るのも悪くはない。そう思っていたが、他の乗組員は絶景に感動し他と言うところは同じだったが、警戒は一切緩めていなかった。

ヘカトンケイルが離陸してから大分時間がたち、ようやくヘカトンケイルは戦場に到達した。

青空が炎上しているかのごとく炎が飛び交っていた。リオレウスがお互いに争っているところを望遠鏡から確認して、対応戦術を構築し、主砲の照準をリオレウスに絞った。

「主砲発射用意！」

そこには多数のリオレウスが空を飛び交っていた。リオレウスたちは群れを足しているのではなく、滅龍砲の砲撃により、大量の火竜の骨髄が拡散して、皆それぞれのテリトリーに侵入者が現れたのだと誤解して外敵排除を目的としてここに訪れたようだ。

「主砲発射！撃て！」

ヘカトンケイルの主砲対飛竜353mm砲が火を吹いた。爆炎に押し出された対飛



竜徹甲榴弾が一匹のリオレウスの翼の根本に突き刺さり、直後に普及型の大砲の数倍の威力の爆発がおこった。

リオレウスは 着弾点から煙を引きながらみるみる墜落していった。

「やったぜ！これがヘカトンケイルのちからだ！」

「そうだ！こいつならいける！」

「てめえらいつまでも調子にのっているんじゃないやねえ！対空警戒をいそげ！」

艦長は乗組員に対し怒号をあげた。乗組員たちも気を引き締め直し再び空をにらむ。同士討ちも起きているとは言っても相手は空中戦においては屈指の戦闘力をもつ飛竜だ。気など抜いていられない。主砲もあくまでも撃墜であり、一撃で息の根を止めるということとは不可能であった。一時的に叩き落としてもすぐに上昇してくる。その後だった。

まるで地鳴りのような振動を私たちは感じ取った。間もなくして、下層部から声がした。

「火炎弾、右舷下層部直撃！同部位装甲甲板破損！」

「消火をいそげ！機関部への延焼だけは防げ！」

大きな打撃を受けたにも関わらず艦長の声は冷静だった。それもそのはずだろう。私は出撃前の指揮官の言葉を思い出した。「俺たちは死ぬために本当に生き抜くために

戦うんだ。」ヘカトンケイルに乗り込むことを決めた者たちは最初から死さえも恐れていない。かといって自ら死にいくというわけでもない。彼らの判断基準は死ぬかどうかではなく悔いが残らないか否かである。そして、艦長は設計から進空までの建造作業に間を挟むことなく立ち会っていたためヘカトンケイルの特徴は隅々まで熟知している。

その意識の賜物か、艦底部乗組員は砲撃からダメージコントロールへの切り替えを迅速に行っていた。全員非常に連携がとれており、彼らと出会って間もない私でも彼らは長い間互いに背中を預け合い続けてきたのだということを実感させられた。

だが、リオレウスたちにとつてはこのヘカトンケイルは排除するべき外敵のひとつではない。ヘカトンケイルのダメージコントロールを許しはしなかった。攻撃は以前として苛烈なままだ。しかしながら、乗組員たちはリオレウスたちの猛攻撃など想定しきっており、狩猟船などでの経験をこの戦場にうまく織り込んでいることが目に見えるほどに上手く対応している。例をあげてみると操舵士の巧みな舵取りで火炎弾を回避し、肉弾戦を仕掛けてくる個体を対空機関砲で牽制することでリオレウスを近づけさせないようにしている。弾の再装填により、弾幕が薄れても、多用途ランチャーからリオレウスに有効とされる閃光弾で対応し、リオレウスの接近を許さない。戦況はヘカトンケイルの優勢に思えた。だがリオレウスの機動性はヘカトンケイルに対して圧倒的な

アドバンテージを持つていた。主砲装填までの空白に確実に攻撃を刻み込むことによつてどうしても捌ききれない損傷を与えていく。正直に言うとな私は不安で一杯だった。

ヘカトンケイルの右舷部分に攻撃が集中してきた。高い威力を誇りかつ猛毒を纏った爪や火炎弾は確実にヘカトンケイルを傷つけていき、大きなダメージを受ける度この指令室まで伝わる振動が発生している。士気が高い乗組員たちに少しずつだが、確実に不安を植え付けていく。不安を植え付けねばならないとは思っていた。だが、「怯むんじゃねえ！ここで逃げたら一生後悔するっ

てことは全員わかつてるだろう！」

「おうともさ、艦長！狩りつてのはこうこなくっちゃならねえ！」

不安からに逃げるために張り子の虎になつていては、本心からこの戦いに生き甲斐をたぎらせているのだと私は悟つた。正直にいつて彼らがなぜここまで戦い続けられるのか、そもそもなぜ戦いに出向くのかさえも十分に理解できていないのだと思う。だが、狩りというのは、恐らくはこういうものだろう。常に命を奪いかねない、本来人の力では抗うことさえままならないほどの力を持つモンスター。人の力では抗うことのできないモンスターを自分自身と共に作り上げてきた武器と今日までに培ってきた経験や技術で制する。それこそがモンスターのハンターのやりがい、ハンターとし

ての生き甲斐なのだろう。だから彼らは今なお戦っている。

それでもリオレウスの大群は依然として確実にかつ激しくヘカトンケイルにダメージを与えていく。正直ダメージコントロールは追い付かない。

そしてついに、大きな爆音と共にヘカトンケイルが激しく揺れた。右舷部分の一部主砲がリオレウスの攻撃を受けて誘爆したからだ。艦長室のドアを乱暴に息を荒げながら、右舷部の砲術員のひとりが出た。「艦長……

！リックのやつが、爆発に巻き込まれて……」

ついにこの艦に殉職者が出た。

「あの…… ばか野郎が…… 今すぐ破損箇所応急修復だ！ ここで挫けて、やつに顔向けることができるとおもうな！」

私は一瞬この船にいる人物たちの戦意が低下することを懸念した。やはり、長年背中を預けあつた戦友を喪うことが悲しくないはずがない。

それでも、彼らの表情は険しくも、決して戦意を失つてはいない。恐らく彼らの中には、この瞬間のように狩場という極限空間の中で共に命を預けあつた戦友の喪失と立ち会つたものも決して少なくはないだろう。それでもなお、なぜ彼らは狩人を続けられたのか続けようとするのかを今でなら理解できる気がする。この空間に溢れる熱情。それが彼ら突き動かしているのだ。

戦意を失うことなくリオレウスを睨み付け主砲と対空砲の巧みな連携で砲撃でリオレウスを撃墜していく。残り数匹となった健在のリオレウスはついには戦意を喪失し一目散に逃げていく。その様子をしっかりと確認した艦長をはじめとする乗組員たちだったが、一人たりとも警戒を解いてはいなかった。

望遠鏡による索敵を行っていた乗組員の大きな声が響いた。

「右舷よりリオレウス多数きやがった！艦長どうする？」

「このまま戦っても、勝ち目は薄い。一度船を安全圏まで離れて、船を降下させて応急修復をする。」

「もしも、ここを離れたくないって思ってるんならあんたにも手伝ってもらいたいが、構わねえな？」

「出来ることは限られているかもしれませんが…… 手伝わせていただきます！」

私は技術屋もかねていたためヘカトンケイルの設計図を読んだこともある。

応急修復もおおよそ完了し、エンジンに再び火をいれはじめたそのときだった。艦長は私に信号銃を手渡して言った。

「手伝ってもらいたいって書いておいてなんだが、おれ自身は、修復が終わり次第、あんたがここから離脱してもらっても構わねえと思ってる。ここから八時の方角に5キロ

メートルくらいはなれてから、その信号弾を撃てば救助の連中が出迎えてくれるとのことだ。

いいか、これが最後のチャンスだ。ここで離脱するかそれとも、俺たちの無茶に付き合うか好きに決めな。」

私は迷いなく答えた。

「はい！もちろん手伝わせていただきます！」 エンジン部や外部装甲など修復するべき部位は数えきれないほどにあったが、艦長を含めて乗組員一人一人が適度な休息をとっていたとはいえ、途中で音をあげる者は誰一人としていなかった。それどころか、乗組員は皆相変わらず生き生きとした表情で作業を行っていた。

一時的な戦線離脱を行ったとはいえリオレウスの攻撃を捌ききりながら何とか応急修復を終えたヘカトンケイルは再び回転翼を作動させ離陸した。向かう先はリオレウスの大群による第二の狂乱の宴が行われる空域だった。

ヘカトンケイルに乗り込んだ男たちの決意と志を見た私はもはやなにも語ることもなく応急修復と離陸のため協力した。専門の知識や技術がないためやれることの種類こそ限られていたが、時間との勝負ゆえに、じっとしていることなど考えられもなかった。

数時間の格闘のはてに、ようやくヘカトンケイルは修復が完了して離陸のためにエンジンの点火を試みた。

修復は万全のはずだ。

再び回転翼を作動させはじめた。

やはり、消耗は否めず、安定して飛ぶことだけでも奇跡と言えた。

ヘカトンケイル本体の整備と同時平行に砲台の整備が行われたため、戦闘力は低下していても戦闘そのものはすぐに再開できた。

「これが最後だ！全砲門撃ちまくれ！」

ヘカトンケイルの主砲が再び火を吹きリオレウスの群れに攻撃を加えていく。すでにいくつかの数の砲門が破壊されて目に見えるほどに戦闘力は低下しているが、それでも群がるリオレウスに互角以上に立ち回っている。

しかしながら、元々気が立っている上にヘカトンケイルという得たいの知れない存在に攻撃を受け続けたせいで、リオレウスたちの怒りは燃え上がっている。

突貫してくるリオレウスにたいして、機関砲を撃ち込み牽制しながら主砲の砲撃を叩き込み、遠くにいるリオレウスが接近しないようにマルチプルランチャーから閃光弾を発射、まばゆい閃光でリオレウスを叩き落とし、半分ほど残された下層部の主砲でどめをさす。という戦術で先程は戦ってきたが、現在では稼働できる主砲の数が減少し、

先程のような戦術は採用できない。だが、艦長は少しも焦りや不安を見せない。至って冷静に状況を把握し、特に積極的に攻撃してくるリオレウスにたいし、残存する主砲火力を集中させ確実に撃破することで、目下の敵であるリオレウスの大群を捌いていく。だが、リオレウスも一方的に攻撃を受け続けるのみではなく、あちこちでヘカトンケイルの砲撃を掻い潜ったりリオレウスたちの火炎弾や爪の一撃はヘカトンケイルに確実にダメージを与えていた。

あちこちで装甲が破損していく音が響き、船内の激しい揺れは続いていく。現状は芳しいとは口が避けても言えない。それどころか、外壁のみならず内壁も衝撃で破損が発生しはじめた。私はとうとう悟った。ヘカトンケイルが限界を迎えているということ。

指揮官は一切の焦りを見せずに乗組員に指示を出し、着実に敵の数を減らしていく。今まで、戦意を喪失している人は一人もいない。逃亡しようとするそぶりを見せるどころか、皆積極的に行動に移している。

やはり、彼らは苦境にたたきられるほどに闘志を燃やすことができるようだ。私の胸のなかにもうまく言い表せないが非常に強い高揚感が燃え盛っている。これが狩りの醍醐味なのだろう。

「全門一斉射用意！撃て！」



艦長が最後の力を振り絞り一斉射の砲撃を放った。

その一撃はヘカトンケイルが放った最後の一撃だった。主砲、機関砲問わず、可能な限りの砲撃をはなつた。

最後のリオレウスもついに撃墜し、脅威は完全に消え去つた。あの数えきれないほどのリオレウスの群れに私たちは勝利したのだ。だが、ヘカトンケイルもあちこちに火災が発生してもはやこれまでという状態であつた。総員退艦を艦長は指示しており、ある程度の乗組員は脱出に成功したが、艦長をはじめとする古参の乗組員は艦と運命を共にする覚悟を決めていた。

私は固唾をのみ、見守つていこう。最後の最後まで、あの子の私はもはやそれしかないと思つていた。

私がいる指令室にも炎が上がっている。消火剤も底をつきており、艦長は血にまみれながらも乗組員に指示を与え続けていた。

「脱出用のパラシュートがいくつか残っているな。まずはあんたからだ。」

「え？」

「当然だろう。俺たちはもう完全燃焼できた。やりたいこともやらなければならねえこともやった。だがあんたにはまだやらなければならねえことがあるだろう。」

「だが私は、できる限りの乗組員を救助する義務がある！それを放棄して逃げるわけに

は行かない！」

すると満身創痍のはずの艦長は私に詰め寄りそして、拳を握り大きく振りかぶった。その瞬間を目に焼き付けた直後に、私は気を失った。

血まみれの紙で殴り書きだが遺言を書きのべた一枚の紙を懐にねじ込んだ。

「安心しろ。俺たちの夢はかなった。最後の最後でハンターとして返り咲けた。どいつもこいつも悔いはのこしちゃいねえ。生き抜けよ。そして伝えていけよ。人の技術つてもんが夢を実現させる希望になるってことをよ。」

そう綴られた手紙を……

艦長によつてパラシュートによつて私が強制的に脱出させられた。

……

直後に、機関部や燃料貯蔵区、弾薬庫が誘爆をはじめて、大爆発を起こした。

ヘカトンケイルのキールは完全に破壊されて船体そのものもまつぶたつになつた上で墜落した。それがヘカトンケイルの最後だった。

……

気がついたら私は病室のベッドの上にいた。身体中に耐え難い痛みが走り回るが、それ以上に頭を占めるのは艦長たちはどうなったかだった。

あとから、残骸回収あるいは負傷者を救助するためギルドから救助隊や専門家達が駆

けつけて、さらにはお見舞いまでできてくれた人々から聞いた話によると私一人が脱出に成功し生き延びたようだ。よって私以外の乗組員の大半は…… 殉職してしまつたようだ。

私の目頭から涙が込み上げた。その涙は嬉しさとは違い、背中を見ていたいと思つていた艦長をはじめ、共に戦つたものたちを失つた悲しみとにも出来なかつた無力感そして自分だけが生き延びたという罪悪感からどつた。

多くの人達がヘカトンケイルの乗組員の帰りを待つていたはずなのに。なぜあの人たちは生きて帰つてくることがなかつたのか。が頭のなかから離れずにいた。

「なぜ僕だけが…… なぜあの人たちは帰つて来なかつたんだ……」

ベッドの上で自問自答を繰り返しているうちになにもかも投げ出したくなる気持ちに何度もいだいていた。しかしながら、それでは私を信じてくれた人達を裏切つてしまふ。

私は無力感や後ろめたさを押し殺した。だが、病院の看護師が私に一通の手紙を届けた。手紙の封を切るとなかに、艦長の婦人からの手紙だつた。

「私の夫のことは聞いています。確かに悲しみで胸が張り裂けそうになつてはいませんが、あなたのせいではありません。どうかあなたが命を失わなかつたということを責めないで。あの人は悔いを残さずに戦い抜くことができたはずだから。」

あなたが書いていくであろう人々の思いの記録がいつしか実を結び、この世界をより良くしていくことを願っています。」

私は涙をこらえきれずに泣き叫んだ。艦長たちは生還しなかったという事実から来る感情がより強く盛り上がってきた。

泣き叫んでいる途中にあの言葉を思い出した。

艦長が最後に残したあの言葉を。いつしか私は泣き叫ぶことを止めていた。あの言葉を思い出してから考えはじめた。あのときの戦いで生き残った者として、あのときの戦いを見届けたものとして何ができるのかを、何をすべきなのかを。

やがて、怪我は治り、病院を退院した。靴の中から艦長の婦人から送られた手紙を取り出して、手に取りながら誓った。私は今回の出来事、ここで起きた戦いを、戦いに参加したもののたちの思いを後の世に語り継いでいくためにやれることをやりつくしていくつもりだ。これから先、ヘカトンケイルのように込められた思いを背負い、多くの希望を、夢を失った人達に再び夢と希望を抱かせる第2第3の空を翔ける巨人が現れるために。

## 雷槌は砂漠に吠える

今回行われ、バスターメイス運用試験は私が立ち会う以前にも運用試験が三回ほど行われた。

一つ目の試験では

火薬進歩が今よりも進んでいなかったがゆえに、弾薬に大量の火薬を詰め込む必要があった。その結果、ミヨルニルのアキレス腱ともいえる弾倉が今よりも大型となっており、引火・誘爆のリスクが指摘されていた。さらに弾倉の材質そのものと断熱材の質そのものの不十分によりモンスター火炎弾によつて実際に弾薬庫に引火・誘爆するといふ事故が発生。

二つ目の試験では進歩した火薬と断熱材そして砲身材を採用したことにより引火・誘爆のリスクを軽減したものの、冷却方法の確立が不十分であったことが起因となった過度の熱疲労が原因で戦闘中にミヨルニルは破損してしまった。

三つ目のこの試験では

再設計と新規素材の採用により放熱性能の向上と軽量化された砲身にさらに補助器具を導入し、取り回しの改善を施したことで実践に充分投入できるほどの改良に成功し

たとの報告を確かめる意味合いも含まれている。

今回は伝統のある村を訪れた。

この村にミヨルニルの再開発をめざした試験運用を依頼した依頼主がすんでいるようだ。

この村を見渡してみると、比較的工業に力が入っているようだ。

指定された住所を訪ねるとそこには壮年の男性がいた。どうやら彼こそミヨルニルの試験運用を希望した本人のようだ。

「はじめまして。私がギルドから派遣されたゲオルグです。」

「そうかい。まあ、よろしくな。」

にべもない返事が返ってきた。

ちやうどその頃、彼は今回試験運用する予定のミヨルニルを整備していた。

とりつく島もないような雰囲気をもとっていたが、私は思いきって彼が今回の試験を希望した理由を聞くことにした。

「よろしければ今回の試験を申し出た理由を教えてくださいいただけますか？」

「さあな。そういうおめえはなんでそんな仕事をしてんだ？」

「私は、かつて歴史学を学ぼうと志しており、農作業の間をぬって古本屋から買った歴史

本を学ぶという毎日を繰り返す。そういった生活をつづけていました。

しかし、私の村の田畑はギルド公認の大規模な工業企業に買い取られました。」

「畑とかも持つていかれたわけか。そりや気の毒だったな。」

「それでもありません。確かに畑は工場に変わりましたが、ギルドの立ち会いのおかげで公害などは発生せず安全に稼働しており、私自身も工場に勤めて学者を目指せるほどのお金を稼ぐことが出来ました。もしも、あの工場の安全性を評価してくれていなかったらあの工場と評価をしてくれたギルドのおかげで今の私がいると違って間違いはないでしょう。そこに、生まれもった好奇心も相まって私は同じように発明品の評価をしようと思いました。」

「…」

「私だけではありません。村全体に多くの資金が提供されたことで生活は便利になり村人にも雇用が与えられました。」

私は、会話が熱が入ったのか、言葉を続けていたが、彼にすぐに遮られた。

「畑耕しもか？」

その眼差しは冷ややかな眼差しとなっていた。

「確かにおめえ含めた大勢の村人は便利な生活とより稼げる仕事にありつけて幸せ

だったのかもしれない。だが、中には自分の居場所、築き上げてきたものをとられたものもいたんじゃないのか？」

「どう言うことですか？」

「その言葉はイラつくんだよ。例え稼げなくても、持ち主にとつちや畑は大切なものだったかも知れねえじゃねえか。」

彼は語気を荒げていた。

「∴ 申し訳ありませんでした。不注意な発言をいたしました。」

「全くだ。おごり高ぶったムカつく物言いだったよ。だからこそ。だからこそだよ。おめえみてえな連中にこそ見せつけてやりたいんだよ。俺たちはぐれものの執念というやつをよ。」

「執念∴ ですか∴」

「ああ、てめえの大事なもんを否定してくる奴らの眼を丸くさせてやりたいとな。」

その語気には確かな執念を感じられた。

今回実施する狩猟作戦は砂漠物資輸送路安全の確保のために、その脅威となっているG級個体の角竜ディアブロスをミヨルニルを用いて狩猟し、その成果を含めて、ミヨルニルの実用性を評価する。

今回使用するミヨルニルは、基本フレームは最近になり精製が可能となった金属で建



造し、g級個体の火竜リオレウスの素材で補強されている。火薬は現在普及されているボウガン用の火薬が採用されている。

砲弾弾頭は複数開発されており、大砲の砲弾のように着弾時に大きな爆発を起こし、敵モンスターにダメージを与える破裂弾が特徴的だ。さらに、

大型モンスターの牙から作られた徹甲弾を弾種のひとつとして採用しており、ゆくゆくは敵体内に毒や捕獲用麻酔薬を流し込む特殊弾頭をやがては開発するようだ。

大型モンスターの牙は比較的高価であるため今回は破裂弾をメインとして採用している。

「本当に私は観測するのみでよろしいのですか？」

「ああ。足手まといを抱えながらの戦いなんてまっぴらなんでね。くれぐれも邪魔するなよ。」

悪態をつけてから、彼は向かった。

これ以上は私も口出しは出来なかった。私に出来ること否、しなければいけないことは確実に試験の結果を持ち帰ってギルドへと帰還することだ。これだけはなんとしてもなさなければいけない。

角竜ディアブロス。砂漠の暴君と呼ばれるほどに攻撃的な性質を持ち、自らの縄張りに入ってきたものは例え戦意を失い逃げ回っていても殺しにかかる。角竜の通称が

示すとおり、想像を遥かに越える重量と硬度を誇る2本の角と甲殻を備え、その角を振り回し相手を突き殺すほどの筋力を誇る恐るべきモンスターだ。念入りに用意をしなければこのモンスターに挑むことは不可能だろう。有効なアイテムは可能な限り使用する

彼はディアブロスに接近し攻撃を仕掛ける。彼に気づいたディアブロスは大きな咆哮をあげるが彼はこれを上手くいなし、背中に懸架していたミョルニルを取り、照準を定める。

「食らえー！」

ガンランスの約1.5倍の口径の砲身が火を吹き、徹甲弾をはなった。徹甲弾は熱砂と地中により鍛え上げられたディアブロスの甲殻を食い破り、ディアブロスの体を穿ち大きなダメージを与えた。当然ながら、その砲撃の反動は凄まじく、大きな負荷がかかったことは私の目にも見えた。それでも彼は適切な姿勢と補助器具の効果により砲撃の負荷を最小限に抑えている。相当な鍛練を積み重ねていたのだろう。彼は他人では真似できないほどにミョルニルを使いこなせている。

しかしながら、ディアブロスはこれだけで倒せるようなモンスターではなく、寧ろディアブロスを刺激したことで状況は一気に緊迫とした。当然ディアブロスは殺気を放ちながら鋼鉄のハンマーの比ではない破壊力を秘めた尻尾を振り回すことで反撃を

した。これを受けてしまったら致命傷になりかねない。

彼は鈍重な装備を身に付けながらもディアブロスの両刃斧のよう形状で、巨大なハンマーとなる尻尾による反撃をうまくいなした。直後に葉莖の排出と砲弾の再装填を行い、シールドにより視界が制限されるにも関わらずディアブロスの弱点のひとつである首元に目掛けて砲撃を直撃させた。強烈な一撃を受けてディアブロスがのけ反っている隙をついて力一杯にミョルニルを振り下ろしたことにより、斧状の刃がディアブロスに大きな打撃を与えた。しかしながら、気性の荒いディアブロスは激昂し、反撃ののろしと言わんばかりに大きな咆哮を上げてきた。幸いに、私も彼も急遽耳を塞いだことにより、影響は最小限に押さえられたものの、怒りによってディアブロスの挙動の速度は先程とは目に見えるほどに変化している。もしもあの場所に私がいたら捌きれることなくディアブロスに屠られていただろう。

戦いは彼の優勢となっていた。だが戦闘中に大きな咆哮が鳴り響いた。私は双眼鏡を音がした方角へと向けた。

私は真つ青になった。私の目に斬竜デインノバルドが映ったからだ。

斬竜デインノバルド 獣竜種の大形モンスターの一種。

背中にまるで炎のような形の甲殻を備え、最大の特徴は大剣のような形状をした尻尾を生やしていることだ。金属成分も高い比率で含有した巨大な尻尾は飛竜の甲殻など

簡単に叩ききってしまう。性格は獐猛かつ好戦的で大型モンスターに遭遇した時でも積極的に戦いを挑んでくる。ディアブロス一頭だけでも不安に駆られていたのだがここでよりにもよってディノバルドが介入してくるとなるともはや試験運用は絶望的だ。

「想定外の乱入です！ここは一度撤退を提案します！」

「ふざけんじゃねえよ！ここで撤退など出来るか！」

私は慌てて撤退を提案したがすぐに怒声が帰ってきた。

「しかし、いまの状況では……」

「だまってみてやがれ！」

これ以上口出ししても彼が動くことはないかと悟った私はそれ以上はなにも言えなかった。それに下手に声をかけたら彼の集中力を削いでしまうかもしれない。そう自分に言い聞かせてなにも声をかけなかった。

今思い返したら私はただ言い訳しているのかもしれない……。あのとき、何かしらの方法で彼を止めていたら結果も変わっていたのかもしれないというのに……

やはり、ディノバルドはこの戦いに参戦し、ディアブロスそして彼の三つ巴の戦いとなった。予想していたよりも状況は極めて困難だ。それでも彼は運用試験を続けるようだ。しかしながら、無策で挑むわけではない。まず、彼はモンスター同士が攻撃を

流れ弾の要領でお互いに攻撃し合う用に立ち回った。機動性に劣るバスターメイスを装備しているがその挙動に無駄が見られないゆえに、上手く攻撃を捌きる立ち回りを見せつけて、両モンスターを誘導している。目論見通りといったところか、ディアブロスとデインバルドはお互いに攻撃しあつた。

同然、両モンスターがいつまでもお互いへのみ攻撃を仕掛けるのみでおわるはずもなく、彼にも攻撃をしかける。しかし、彼はことごとく捌ききり、隙を突いてはバスターハルバードの強烈な砲撃を撃ち込んでいき、甲殻をえぐり、力一杯でいて正確な打撃で甲殻を砕く。それを繰り返してディアブロスとディアブロスを追い詰めていく。

このまま一気に両者を討伐とはいかずとも、せめてどちらかが退避することを願っていたが、やはりそうはいかないようだ。この二匹は両方とも簡単には引き下がらない性格だ。この三つ巴の戦いは長丁場となるだろう。

しかしながら、戦いを傍観している私でさえも、いつ倒れてしまいかわからないほどの酷暑により一瞬だがに隙が生じてしまった。好機とばかりにディアブロスは想像を絶するほどの重量を誇る双角をかざして猛突進した。その突進はデインバルドごと彼を突き飛ばした。幸い急所は外したものの、左外腹斜筋がえぐれて、突き飛ばされた衝撃で血を吐き出していた。

デインバルドも突き飛ばされたことにより、胴体の甲殻を穿たれ、肉や骨を大きく抉

られた。

見かねた私はその場に駆け込みそれと同時に閃光玉を投げてデイノバルドとディアブロス両方の目をくらました。バスターハルバードと彼を載せて救助用リアカーを全力で走らせた。

一心不乱に走り込んだからか、気がついてたときには救助用リヤカーでベースキャンピングになんとか帰還した。正直あの状況からよく逃げきれたものだと思身でも感じてしまう。

「借りができてしまったか……ゴフッ！」

「まだしゃべってははいけません！」

補助器具が破壊されてしまった。これにより、機動性はより悪化してしまった。それでも彼は戦意を失う素振りが見えない。止血などの応急処置をすませたら、すぐに回復薬グレートと2本立て続けに飲み干し、ディアブロスとデイノバルドがいる場所へと向かった。

「その体では、無茶です！かつての問題点は全て解決しています！これ以上戦っても無意味です！」

「黙ってみてろといっただろう！」

一際威圧的な怒号に私は言葉を失った。

「さつきみてえなハマはしねえよ。安心しろ。」

「…」

言葉をつまらせていた私だが、進言することにした。

「それでは、先程のような事態になったら実験は中止させていただきます。勿論、そうならないようにとは思っています」

「ふん、えらそうに。おめえはおめえの仕事に集中しやがれ。」

彼は悪態をつきながらも心配りの言葉を送ってくれた。

彼は先程と同じように上手くモンスターの攻撃が相手モンスターに当たるように誘い込む。反撃を仕掛ける。

ディアブ羅斯は彼を目にすると地中に潜り込んだ。敵の真下に潜り込み突き上げるというディアブ羅斯最大級の特技を仕掛けた。彼は敢えてディノバルドの間近に飛び込んだ。

その一撃を回避すると同時にディノバルドに命中するように仕向けた。今度は直撃とまではいかなくても十分なダメージを与えられたことが私からでも確認出来た。

その一方で突き飛ばされたディノバルドもすぐに立ち上がり、怒りの咆哮をあげた。激昂したディノバルドは報復として喉で生成された火炎弾を乱発し、そのうちの何発かをディアブ羅斯に直撃させた。一方で彼は飛んできた火炎弾を全て回避した。しか

しながら、先程のダメージの影響は目に見えている。砲撃の反動制御も今の状態では正直できているのが不思議に思えてくる。

ディアブロスとデイノバルド両モンスターの大規模な一撃を回避し、的確なカウンター攻撃を仕掛ける。

しびれを切らしたであろうデイノバルドがとどめをさすかの如く、デイノバルドは尻尾を噛み、そこから引く抜く形で摩擦熱を尻尾に溜め込む。ディアブロスも咆哮をあげて全力の突進を仕掛けようとしている。

「チャンスだ！」

彼は両者の間に入りこんだ。互いの渾身の一撃をぶつけ合おうと目論んでいたからだ。

一歩先と言うべきか、デイノバルドの斬撃はディアブロスの左角を叩ききった。自慢の角を切り落とされたディアブロスはバランスを崩しともの、怒りは頂点に達した。もはや彼を見向きもせず渾身の突撃でデイノバルドの大きな身体を穿ち、大きく振り上げた。デイノバルドの巨体が宙を舞い、すぐに地面へ激突した。

彼の目論みは成功した。

のやり取りが続き、ディアブロスとデイノバルド両モンスターを討伐に持ち込んでほしい。



しかしながら、狩猟の世界はそのような甘い希望的観測を打ち砕く。

デインバルドは至近距離から火炎弾を連射し彼

ごとくディアブロスを攻撃した。一方のディアブロスもなぎ払うようにその尻尾を一回転させた。その結果、まずディアブロスの尻尾による重い一撃が彼の体制を崩させた。そこにたたみかけるかのごとく、デインバルドによつて連射された火炎弾のひとつが体制を崩した。彼に直撃した。

着弾した火炎弾の激しい爆発により、彼は大きく吹き飛ばされ、身を守っていた防具は半壊し、彼自身の肉体にも大きなダメージを与えた。これ以上の戦闘は無理だと私の目にも明らかだった。

私は再び閃光弾を投げてディアブロスとデインバルドの視力を一時的に奪い、彼を再びリアカーにのせて一時退却を行った。

これではさきほどと全く同じではないか。自分自身のふがいなさに打ちのめされそうになるがその感情を抑えてベースキャンプへとひたすらに駆け込んだ。

「もう無理でしょう！これ以上戦ったら貴方は……」

「バカヤロウ！」

拳が私のほほを打った。満身創痍の人間のものとは思えず、歯が折れてしまいそう

だった。

「もはや俺にはこれしかねえんだよ…。」

彼は絞り出すように言った。

「こいつは俺そのものだったんだよ。時代の流れに上手く乗れなかった。だからずっとうずくまっていた。技術が進歩する度に「あのときこの技術があったらミヨルニルは…。」といつもいつも思っていたんだ。やっとそのときが来たんだよ。それに…。」

「それに…？どうしたのですか？」

「そもそも俺は酒に溺れたからか、あと少しでくたばるようだ。だったら、最後の最後でひと暴れしてえだろが。」

「…それなら約束してください。絶対に生命を捨てるようなことをしないと。生きて帰還すると。」

「わかったよ。うるせえな。」

顔を見せることなく彼はぶつきらぼうに返事した。

ディアブロスの生命は尽きようとしている。それでもディアブロスは向かってくる。

「止めだ！」

ミヨルニルは特別大きな砲声と硝煙を上げてディアブロスを貫いた。

ディアブロスは崩れ落ち果てた。しかし、ほとんど同時に 力尽き倒れた。

私は彼を再びリアカーにのせ、ベースキャンプに向かった。

「ディアブロス討伐おめでとうございます！これでミヨルニルことバスターメイスの有  
用性は充分なものだと太鼓判を押せます。」

「ああ、そうだな。だが、デイノバルドはまだ倒していねえ。」

相変わらず反応はそつけない。目標はまだ達成されていないかのようにだった。

「今から迎えを呼ぶために信号弾をうちます。その後は休憩をしましょう。」

「言われずとも先に休んでるぜ。」

彼はそう言い、テントへと入っていった。

そう言ってもまもなくキャンプのテントから彼がビールが入った樽で出来たジョッキ  
を二つ持つて現れた。

「おい、一杯付き合え。ディアブロス討伐の祝い酒だ。」

「確かに私の好物はビールですが、失礼ですが貴方のお体は大丈夫でしょうか？」

「一杯くらいどうってことねえよ。気にしすぎなんだよ。」

「……わかりました！評価試験終了を祝って乾杯！」

私は彼とのみ交わした。

塩ゆでした枝豆をあてにビールを嗜んでいたが

途中で私はものすごい睡魔に襲われ、その場で眠りについてしまった。

後日振る舞われていた酒にはネムリ草が含まれていたらしく私は眠りについてしまった。

私が目を覚ましたとき真つ先に目に写つたのは、救助隊の隊員の顔だった。

私が救助隊と共に向かったころには、デイノバルド、デアブロス両モンスターを討伐こそしたものの、もう助からないまでに負傷した彼が倒れていた。

それでも私たちは諦められなかった。何とかして彼を救出しようとその場にいるものと一緒にできる限りのことを試みた。

「みたかよ。これがはぐれものの執念さ。この執念をしつかり書き付けてくれや。」

「言つたじゃないですか！絶対に生きて帰還すると！」

「ああ、すまねえな……けれどありがとうよ。こんな俺にたいしても生きてくれって願ってくれてよ……」

その言葉を残して

息を引き取った。

彼が息を引き取った数時間後によく増援が駆けつけた。彼らから到着が間に合わなかったことへの謝罪の言葉を受けた。

「お気になさらず。あの人は悔いを残すことはなかったですから……」

この言葉をもつてしかわたしは返事をする事が出来なかった。返事をする資格がないと思つたからだ。

私にはハンターとしての才能も勇氣もない。だが何があつても彼が見せてくれた執念を刻み込んでいくつもりだ。

そして、何らかの形で私も彼が見せてくれた矜持を持てるようにしたい。

## 海獣の槍は災いの渦を砕いた

ここはタンジアの港。世界に名を連ねる大都市の一角で世界最高峰といっても過言ではないほどの繁栄している港町である。今回の兵器運用試験はこのタンジア付近の海域で実施される。

「あんたかい？ 今回の試験監督さんは。」

20代前半ごろの年頃の男性が出迎えた。

「はい。私はゲオルグと申します。」

「そうかい。まあ、よろしくな。」

「見せてえものがある。ついてきな。」

そういつて彼は倉庫に向かった。私も彼について行った。

その倉庫に今回運用試験を実施する水中戦闘艇マーライオンが格納されていた。

「こいつを設計したのは俺の爺さんだ。けれども爺さんも親父ももういねえ。親父は黒いラギアクルスにやられたらしくてな。」

彼は布を取り除き、マーライオンの全貌を見せた。

祖父が開発・建造したといっているが、外見はまるでつい最近建造されたかのようなだった。動力部等も見せてもらった。そのなかには最新技術が織り込まれていることが動力部などからわかった。いかに近代化改修を行っていたかが理解できる。

「これは……すごいですね……」

「決まってるんだろ。こいつは特別な存在なんだ。少なくとも俺にとつてはな。」

今回の試験運用は安全な海路を確保するために、海路内にはびこっているG級ガノトトスの排除をかねて行われる。

彼自身ガノトトス狩猟の経験は無数にあるらしく、自信と余裕を見せていた。

「口や紙ではこいつをはかれはしない。今からそれを証明してやるよ。」

不適な笑みを浮かべてそう告げた。

彼は父の形見とされる傷の補修あとが残るラギアX防具を身に付け、マーライオンに搭乗する。スクリューを起動させて彼は海へと潜る。

その一方で私は水中用望遠鏡を乗せた潜水艇に搭乗し、戦闘を観測する。今回でも私は傍観者でしかない。できることと言えば撤退要請の信号弾と水中用閃光弾を発射す

ることくらいだった。やはり、傍観者でしかないが故の歯がゆさを押し殺しながら私は任務に当たる。

母船に乗り込み出航してから数時間後、海藻が生い茂っているにも関わらずエピオスが全く見られない海域に到達した。それは危険なモンスタースターがいるという証拠だ。推測通り、ガノトトスが発見された。まだこちらに気がついていないうちに私は母船に搭載されている観測用潜水艇に乗り換え、彼はマーライオンにまたがった。ガノトトスがいる海域に到達してまもなく、ガノトトスに遭遇した。彼はガノトトスめがけて全速前進し、火器の照準をガノトトスに合わせた。

そこから戦闘が開始された。

彼は牽制をかねた先制攻撃としてボウガンよりも射程距離の長い通常弾を発射した。ボウガンとは比べ物にならないほどの速度で速射された専用通常弾はガノトトスの弱点を正確に穿ち、ガノトトスの鱗や皮膚に傷をつけた。いきなり傷をつけられたガノトトスも黙っているはずもなく当然彼に向かって反撃を仕掛ける。

水中は文字通りガノトトスのホームグラウンド同然だ。陸上戦闘と同じ感覚で戦い、敗北するハンターは数知れない。海竜種を凌駕する水中でのガノトトスの敏捷性はガ



ノトトスに海の王者という異名を与えていた。

しかし、彼は水中戦を幾度となくくぐってきた。ガノトトスも何度も仕留めて見せたそうだ。現に、戦況は彼の優勢となつてゐる。手慣れた手付きで推進ユニットを動かしてガノトトスの攻撃を回避して攻撃を当てていく。ガノトトスが怒りだしても全く動揺せずに攻撃するタイミングと反撃を回避する必要があるタイミングの両方を見極めている。海中の岩石の塊も粉々に砕く突進も、多くのハンターを苦しめたあのタツクルも、岩盤も金属の塊も簡単に切断する水流プレスもそのハンドル捌きで見事なほどに回避している。よくみると、あえて攻撃が当たる寸前まで動かず、その上でなんなく回避することでマールライオンの機動性をこちらにアピールしている。彼の自信がうかがえる。慢心はあつてはならない行為だが、彼の意志の強さは眼に焼き付けることができた。

多くのモンスターは戦いを続ければ疲弊し、動きが鈍る。ガノトトスも例外ではなく、背鰭垂れるようになってゐることからガノトトスが疲弊していることが目に見える。彼はそこに畳み掛ける。その反撃として肉薄してゐる彼めがけて叩きつけるように尻尾を振り下ろすガノトトスだが彼は回避し、ガノトトスめがけてハープンランチャーを撃ち込む。ハープンランチャーは対大型モンスター用にスケールアップした巨大な銜を射出する射撃兵装で敵モンスターの鱗や甲殻を貫通し内部から爆破する

マーライオン独自の武装だ。

その武装を用いてガノトトスに大きなダメージを与えるのだ。

ハーブーンランチャーはガノトトスの鱗と皮膚を突き刺さった上で爆発しガノトトスの体を抉った。

えぐれた部分めがけて弾速が鈍いがハーブーンランチャー以上の威力を持つ超小型魚雷を発射した。

ガノトトスが動く位置と速度を見極め、魚雷を撃つことにより大きな打撃を与えた。

疲弊して動きが鈍っているとはいえ弾速の遅い魚雷は命中させることそのものすら困難だというのに、ハーブーンランチャーでできた傷に正確に当てた。彼の腕前のみならず機敏に照準を変えることが出来るマーライオンの機動性があってこそできる芸当だ。

魚雷によって止めを指したことによりガノトトスをついに討伐することに成功した。

ガノトトスとの戦いが終わって剥ぎ取りを行おうとしたそのときに思いもよらないことが起きた。白海竜ラギアクルス亜種が現れたのである。

魚雷と銛はすでに撃ち尽くし、通常弾ものこりわずか。それでも彼は退却する意志を見せない。

私は心拍数をあげながら彼とラギアクルス亜種を見ていた。

ラギアクルスの放電攻撃を回避しきれず左サブエンジンが破損した。しかし、マーライオンはデッドウェイトとなりうる破損部位を切り離すことが出来るよう設計されている。左サブエンジンを切り離した。当然ながら重量バランスも変化するはずだが、彼は苦もなく対応している。ラギアクルスは攻撃を当てられずに、攻撃ばかりを受けるこの状況に苛立ちを増している。そして怒りの咆哮をあげた。モンスターは怒りの感情を露にするときに攻撃力と敏捷性が高いが冷静さは失う。この時こそ判断力が試される。彼は十分に距離をとり、敵が肉薄してきた際にはすれ違いざまに機関砲で通常弾を当てながら反撃の隙間を潜り抜けて背後に回り込んだ。一歩間違えばラギアクルスに激突しマーライオンは破壊され彼自身も死んでいただろう。それを恐れずに行った。

戦闘が長引けば必然的に弾薬や推進材も遅かれ早かれ底をつく。マーライオンも例外ではない。通常の狩りでは制限時間が近づくであろうタイミングでマーライオンの推進材が底をついたため、さすがに今度こそは退却することとなった。予備の推進材タンクに交換して退却する。こちらもラギアクルスに気付かれないように退却した。陸

にあがった彼は手当てを受けたあとにも言わずに、マールライオンを引き揚げて、身だしなみを整え直して、工房を兼ねた自宅へと戻っていった。

彼が自宅に戻る前に私は問いかける。

「今回はラギアクルスの狩猟はできませんでしたが本来の目的であるガノトトスの狩猟には成功しました。したがって試験は成功したと報告し、あのラギアクルスの対処についてはギルドに任せることを提案しま…。」

私がいいきる前だった。

「おそらくあのラギアクルスは親父の敵だ。親父は海で奴に殺された。ケリは俺がつけるや。」

「別個体という可能性もあるのではないのでしょうか？」

「奴の右肩にある傷跡は親父がつけたものだ。それにこれをみな。」

懐からラギアクルス亜種の鱗をとりだした。

「これは親父が残したラギアクルスの鱗だ。」

「これと今日俺が手にした鱗を比べれば年輪から奴が親父を殺ったラギアクルスだと証明できる。」

「奴を仕留めれば親父の手向けになるかもしれないねえ。奴は必ず俺が仕留める。」

彼の決意は固い。それでも私は説得を試みる。

「お気持ちには察しますが、今回の戦闘によるダメージは相当のものです。明日も戦いにいくなんて無茶です。機体の修理だって」

「機体の修理は間に合う。身体の方も傷は塞いだんだ。一眠りすればどうってことねえよ。ギルドからもすでに話は通してある。他に文句はあるか？」

「お身体のダメージはとて明日に回復できるものではありません。どうかご自愛なさってください。命あつての物種です。あのラギアクルスは通常のラギアクルスを遙かに上回る戦闘力を持っています。」

一瞬沈黙が走る。

「：：俺の爺さんが言つてたことばなんだがな。今日がどんな1日であつても体が行けるなら明日も海に潜りに行きたいと思えるやつこそ海にもぐりがいを見つけれられるんだよ。だから俺はあの海に何がしようが明日も海に潜りにいく。そして奴に挑む。明日もダメだつたら明後日も潜りに行く。あんたがなんと言おうとな。」

「挑み続けたいということですね… だけれど…。」

「だけれどなんだよ?」

「挑み続けた結果!死んでしまった人たちを私は何人も目にしてきました!どんなに技術が進歩しても失われた命は帰ってこないんですよ!」

私は声を荒げていった。

彼は感情的になることなく冷静に切り返す。

「その人たちに悔いはあつたか?」

「それは…」

彼は私以上に彼等を理解していたのだろう。そう思い自分自身の未熟さがあまりにもふがいなく感じた。

「少なくとも俺は後悔したまま長生きするより、例えどれだけ短くても悔いを残さず生き抜きてえ。もつとも、あんたのその気持ちはまんざら捨てたもんじやないと俺はおもっけどな。」

「…ありがとうございます…。健闘を祈っています。」

それしか言えなかった。これ以上の干渉はしてはいけないと思った。

「余計なこと考えるな。こちとら死ぬ場所は海の上じゃないと決めているからな。船乗りは死ぬときは陸の上にしる。これは親父の言葉だがな……だから俺はあの海で死ぬつもりはねえよ。とにかく俺は奴を仕留めるまで終われねえ。」

「わかりました……」

なにも言えず立ち去ろうとしたときだった。

「ところであんたはどうなんだい？少し不都合があるだけで直ぐに投げ出すのかい？」

「……わかりません……」

「そうだろうな。そんなに早く答えは出せねえ。だけど退くことと投げ出すことは違う。狩りつてものは引き際が肝心だが簡単に投げ出すのはいけねえ。これだけは覚えておきな。」

「ありがとうございます。」

「いつの日かその問いの意味と答えを必ず見いだします。この試験、明日で完遂させましょうー!」

「ああ。」

彼はマーライオンの修復と調整に向かった。

私も機械いじりには心得がある。マーライオンの修理に手を貸す。

「私にも手伝わせてください。」

「そうかい。助かるよ。」

私は持ってきた工具で修理を手伝った。

「予想よりも早く終わったよ。ありがとうよ。」

「こちらこそ、マーライオンのすごさを改めて感じる事が出来ました。」

「ちようどいい。気に入っている店があるからそこでめしを食いにいこう。」

彼は好物のコダイオウイカのリング揚げと女帝エビのフリットそしてコールスロー

サラダを注文した。

私も同じコダイオウイカのリング揚げと女帝エビのフリットとコールスローサラダ



を注文した。

カリカリに揚がったリング揚げに特性のソースをつけて頂く。

「モンスターを仕留めるあるいは捕獲することができれば漁師が帰ってくる確率は大きく上がる。」

「ですが、私という資格はないと思いますが、海は人間だけのものではありません。例えば大型モンスターであつても安易に滅ぼす権利は誰にもないと思います。」

「まあな。その塩梅が難しいってもんだろうさ。」

「それでも私は考えることをやめるつもりはありませんよ。」

「それでこそだな。それじゃあ乾杯といこうか!」

私達はビールをあおった。

そのつぎの日の早朝私達は集まった。当然のことだが二日酔いなど兆候もなかった。今回で四回目の出撃だ。やはり、ラギアクルス希少種はこの海域に留まっている。

ラギアクルス亜種に向けてマーライオンの主武装ハーブーンランチャーから貫通弾以上の威力を誇る銛が発射された。今回はハーブーンランチャーを増設し火力を向上させている。銛はガノトトスの時のようにラギアクルス希少種に突き刺さり、内蔵された炸薬により内部から爆破した。しかし、相手はガノトトスよりも遥かに強力なモン

ターだ。ガノトトスはこれでトドメをさせたがラギアクルス亜種は倒しきれなかった。そのため次弾装填をした。予備の弾倉は可能な限り持ち込んでいる。さらに、海域の可能な限り付近のいくつかあるポイントに追加の弾倉を設置しているとのことだ。曰くこれらがあればG級のラギアクルスも三匹は狩猟できるようだ。

多くのハンターの脅威となつている放電攻撃も、ウォータージェットを用いた緊急回避で難なく回避した。時間の経過により酸素が不足してきたため、彼はイキツギ藻を齧り、酸素を補給した。退却することなく戦闘を継続するようだ。「俺は何度だって海に潜り、獲物を何度だって仕留めてきた。今回だって絶対に仕留めて見せるさ。」

慢心のように聞こえるこの言葉も私自身うまくは言えず恐縮だが確かな芯がある言葉に聞こえた。

ハーブンランチャーの直撃を見届けた後、ラギアクルス亜種の反撃を受けた。その鋭い爪と豪腕で急所ではないものの彼の身体を防具越しに切り裂いた。

最後のハープリンチャーがパージされた。水中用超小型爆弾も使い果たした今、有用な攻撃手段はもはや通常弾のみだろう。マールライオンにはモンスター級の甲殻を簡単に穿つドリルが搭載されているが、今の状況で使うのは危険すぎる。

一持ち込んだハープリンチャーをうち尽くしたことで弾薬補給を行うため第一設置海域へと向かう。

彼自身も海面に上がり新鮮な空気を思いきり吸った。

ハープリンチャーもうち尽くした状態で戦うことができるのか？そんな危惧が私の頭に渦巻いていた。

彼自身も満身創痍でもはや弾薬は残されていないはずだ。撤退するしかないだろう。撤退要請の信号弾を発射した。しかし、彼が応じる様子は見られない。

ラギアクルスの放電を間一髪でかわす。その後、急旋回し、推進機関の力を最大限にしてラギアクルスめがけてドリルを回転させながら突撃を仕掛けた。

ドリルを切り離れた後はありったけの武装の一斉砲火を浴びせた。ありったけの攻撃を受けてラギアクルス亜種が断末魔をあげてついに力尽きたことを私はみとどけた。私はそれを確認し、すぐに救助に向かった。ラギアクルスの処理はその後でいい。誰も

がそう思ったはずだ。

彼を陸にあげて、すぐに救助隊が処置を行った。その後に、処理班がラギアクルスの亡骸を回収した。

しかし、もうすでに彼は手遅れだった。だが、ラギア×ヘルムから除く口元には会心の笑みが浮かんでいた。

「今日はいい獲物がとれただろ?… 試験監督さんよ…」

涙にあふれながら私は言った。

「勿論です。」

「最後にいわせてくれや。あんたがこれからどう生きるかはしらねえがどんな結果になったとしてもあんた自身の挑戦を否定するな… そこからなにかを拾いだせれば勝ちなんだからよ…」

「悔いはありませんか?」

「聞くまでもねえだろ… 悔いなんてこれっぽっちもねえよ。あんたも悔いの無いように生きろよ。」

彼は… 動かなくなった。

彼の生涯は壮絶な海での戦いの果てに陸の上で幕を閉じた。

私は彼から教わった。どんな不都合が起きても失敗に一喜一憂することなく何度

だって挑み続けければ報われるのだと。何度も挑み続けられることこそが本当の強さなのだ。

今一度思い知った。人類の進歩は技術に限らず、文化や芸術などあらゆることにおいて挑戦による失敗から学び、成功を産み出してきたのだと。

## 約束を抱いた英雄の槍は呪いの砦を穿つ。

現代では旧大陸と呼ばれているこの大陸に生息していた砦蟹シエンガオレンが進撃を始めた。その進路予測地点には旧大陸でもかつては有名だった大規模商業都市が進路方向下にあつた。もしも、シエンガオレンの進撃を許せば旧大陸の物流と経済に大きな打撃を与えることになる。ハンターギルドもこれに対し万全の体勢をもつて迎撃に当たる。

その際に、この兵器の開発責任者にして有名な実業家であるハンス氏はゲイボルグによる火力支援として参戦を希望したのであつた。

「始めましてハンスさん。私はギルドより派遣された兵器調査機関に所属するゲオルグと申します。」

「こちらこそ始めましてだ。早速だが君に今回の兵器運用コンセプトとプランを説明しよう。」

「まず、護衛部隊と警備部隊を配置する。そこからゲイボルグの設置作業となる。設置地点の特定後に予め建造し追えた砲身兼火薬室を連結させる。」

「なお、油圧式パイルで固定した土台に設置してから連結させてあるため、射角の調整も

可能だ。その後液状の火薬を注入する。主成分はブラキディオスの粘菌であるため細心の注意が必要となる。」

「後は照準をシエンガオレンに向けて、ゲイボルグを放つだけだ。そうすれば、ディアブロスの剛角で構成された弾頭部分がシエンガオレンの頭骨さえも貫通し、発射後に展開される起爆装置により奴の内臓を正確に爆破できる。」

「しかし、失礼ですが、この兵器は膨大な予算がかかるとされ、採用は見送られております。それがなぜ今になって建造が実現したのでしょうか？」

怒りの表情ではなく静かな表情を私に向けた。

「君はこの兵器が15年前にはもうすでに設計されており建造可能だったと言うことを知っていたか？」

「15年前：：ハッ！」

私はハッとした表情となった。

「この大陸の大規模工業国家がシエンガオレンに蹂躪された日だ！まさか貴方は!？」

ハンス氏は表情をより一層険しく引き締めた。

「気づいてくれたようだ。その国は私の故郷でもあったのだ。」

「あの作戦は国が総力を上げて迎撃がに当たるもシエンガオレンによって国は壊滅したと報告されておりますが。 . . .」

「それは奴らの都合に合わせた誇張と解釈でしかない！あの作戦でゲイボルグを建造してきた。そうでなくとも十分な迎撃が出来た！だが、ゲイボルグどころか、兵器の近代化を無駄な予算として、それに費やす予算などない！あの国の軍上層部は、戦いを結果と数値でしかしない奴らは利権のために国防予算を捻出せずに私腹を肥やした結果、国そのものを滅ぼしたのだ！」

ハンス氏の眼から祖国の為政者への憤怒が感じられた。

「このゲイボルグがあれば、国は滅ぶことはなかった！私自身も妻と息子を喪うことはなかった！それを証明するために私達はこれまでを、そしてこれからを生きていくのだ！その為に、同胞と共に少しずつ資金と資源を集めてゲイボルグを建造したのだ！」

机を力強く叩きながら彼は声を荒げた。固く握った拳から悔恨と決意の念がにじみ出ていた。

確かに、彼が提出した報告資料にこの兵器を一門建造する際に、必要とされる資材の量だけでも武器・防具一式統一しても数十人分の武器・防具を製造できると報告資料にもかかっている。これを建造できるほどの予算と資源を確保・投入するにはよほどの譲れない感情がない限り出きることはない。そのような強い熱情を抱いた戦士たちを私は何人も見てきた。

ハンス氏本人はかたつた。



「確かにこの兵器の運用は資源の無駄なのだろう。だが、約束したのだ。愛する息子との約束を果たすために。そして誓ったのだ。愛する妻の敵を討つことであの忌まわしい過去に決着をつけるのだ。」

ハンス氏は拳を固く握っている。ハンス氏の無念が伝わってくる。誰が彼を止められるだろうか。

王国最後の日の夜は砲火の炎と火災の炎によって赤く染まっていた。砦蟹シエンガオレンの蹂躪と兵士の抵抗によるものだった。兵士たちは火砲をもって反撃を試みるも火力が足りず、追い払うこともままならない。シエンガオレンのなすがままだった。

「最終防衛線突破されます！」

最終防衛線にはまだ避難していない人々が大勢いた。

「しっかりしろ！しっかりするんだ！死んではいかん！」

ハンスは避難が遅れて負傷していた息子を抱いていた。ハンスは妻をこの日のシエンガオレンの襲撃により喪っている。そしてまだ五歳の息子の命も今にも途絶えようとしている。

「お父さん……お父さんが作った大砲だったらお母さんを守れたの？あの大きな力二を

やつつけられたの？」

「そうだとも。それを必ず証明して見せる。だから、その日まで生きてくれ！」

「ほんとう……？ 僕、お父さんの大砲すごく好きだから……」

「私は息子の手を握りしめたが返事はなかった。金に一切の目を付けずに手を尽くしたがあの子は……救うことが出来なかった。妻も子も守れなかった。父親である私が命に換えてもなさなくてはならない使命だったのに……」

ハンス氏は無念の表情をしていた。

「奥さまとご子息様の敵討ちということですね。私に否定する資格はありません……」

「そうとも、君だけではない。誰にも否定も邪魔もさせない。そもそも、私がゲイボルグを今なお開発研究している一番の目的は敵討ちだけではない。あの子との約束を果たすためだ。そのために私はこれまで生きてきた。そしてこれからも生きていくつもりだ。約束を果たすまでは。私と私の同胞達はあの苦しい過去に決着をつけるためゲイボルグを完成させるつもりだ。そのゲイボルグをもってシエンガオレンを討ち取る。」

彼の瞳からは揺らがぬ決意が見える。だれが彼を批判できるものだろうか。

「わかりました。必ずゲイボルグをもってシエンガオレンを討伐しましょう。」

私は毅然とした態度で答えた。

今から4日後に現在設置中であるゲイボルグの射程範囲にシエンガオレンが現れるようだ。

「ゲオルグ。シエンガオレンの迎撃にゲイボルグを投入するためには今から設置作業を行うことが必要だ。君も協力してくれ。」

作業を断ることは出来なかった。後悔はしたくなかったからだ。後悔することがなかったとしても自ら進んで私は取り組んでいただろう。彼への憐憫ではなく敬意として。

油圧シリンダーの砲身傾向装置は最新鋭のものが導入されている。細かいパーツに至るまで近代化を重ねているようだ。彼等は私とは比べ物にならない速度で作業を進めている。だが、作業が遅れている私を責めることなく自らの作業に没頭している。文字通り寝食を考えている間がなかった。

ハンス氏は開始から1日かけてゲイボルグ設置作業の全てを完了させた。

ゲイボルグ発射実験当日が訪れた。物資、心身ともに不備はない。その日の気候もゲイボルグの妨げになる要素にならなかった。ゲイボルグの設置作業も完了している。後は火薬の注入とシエンガオレンが射程圏内に来ることを待つだけだ。誘導作業とゲイボルグの護衛もハンス氏の同胞が担当している。

「なあ、あいつらなにやってるんだ？」

「超長距離砲とやらの試験運用だよ。こちらを巻き込まないでほしいもんだよな。」

「ああ、全くだ。邪魔くせえたらありやしねえ。オモチャ作りならよそでやれよな。」

「こちとらあんなもんに期待してねえよ。」

自衛軍による陰口が私の耳に流れ込んでくる。

私は彼等を説き伏せることができない不甲斐なさど誹謗への怒りを押し殺し、ハンス氏の元へ向かった。

ゲイボルグの設置作業が開始されているなか、私は申請に対するギルドの回答を告げた。

「私達とは違う国防軍隊との合同でかつ、彼等の活動を妨げない範疇の行動で遂行にあたるというなら許可することです。」

ハンス氏は嬉しそうではなかった。約束を果たすため、ゲイボルグを使用することをギルドが許可したのだというのに？

「私達には期待していないということだろう。実際奴からは少なく見積もっても設置地点から最短でも50kmほどの距離があるではないか。」

確かに、戦艦の主砲をもってしても届く距離ではない。

建造と装填が完了し、交代作業による火薬の注入作業が終わるまでは出来ることがな

く、交代で警備を行いながら半日ぶりの食事となる昼食を取ることに。

その日の昼食にはザワークラウトが振る舞われた。

「このザワークラウトは社長が奥さんから教わった漬け込み方で漬け込まれたんだよ。あんたも俺たちの仲間としてこの味を覚えておいてくれよな。」

私はザワークラウトを飲食店やホテルで何度か食したことがあるがこのザワークラウトはどのザワークラウトよりも美味しかった。

結局ゲイボルグは四門建造された。今回の作戦では一門につき、一発のみの発射となることが現実的見解だと言う。

ここからシエンガオレンは約60kmほどある。そこから届く砲撃をできるのか？

「ハンス社長！シエンガオレンは今でも60km程の向こうにおり、今なおここから遠ざかっていきます。砲撃が届くとはとても思えないのですが……」

「届くとも！ゲイボルグの最大射程距離は80kmだ。ここからなら十分だ。」

にわかには信じられないが、ハンス社長は会心の笑みをもって答えた。

実際工兵達は設置作業の手を緩めない。

「1番から3番までの加速用火薬注入完了しました！」

「残りは4番砲台だけだな！いそげ！一番から三番砲台は狙いを定めろ！」  
発射の時は近い。

望遠鏡で向こうを見てみるとやはりシエンガオレンを食い止めることはかなわない。バリスタの砲弾や大砲の砲弾がシエンガオレンに向けて殺到するもシエンガオレンの甲殻にダメージを十分に与えられていない。

「全火薬注入完了しました！砲撃いつでも可能です！」

シエンガオレンの強酸砲撃あるいはその暴発を防ぐべく狙いを脚部に変更し、全砲門を脚部のつけねに向けて照準に変えた。

そこに千刃竜セルレギオスが現れた。

通常ならそこから待避するのが常識だが、セルレギオスの急襲にカレラは誰一人として眉一つ動かさない。

「計算外の事態だが、対応可能だ！拘束弾一門撃て！」

バリスタ式拘束弾がセルレギオスの動きを封じた。その間に護衛部隊の1/3の兵士がセルレギオスを包囲した。彼等はセルレギオスの襲来もその鮮やかな対応にも目を向けない。そして、彼らの無反応にバリスタの砲主も不満の表情は微塵もない。みな全ての精神をシエンガオレン討伐に集中していると言っても過言ではない。

砲撃部隊はセルレギオスに目を向けず、引き続き照準をシエンガオレンに向けていた。

「第一から第4砲台発射準備完了！」

その時だった。シエンガオレンが脚を上げ、ラオシャンロンの頭骨の口の部分を開いた。硫酸プレスを放つつもりのようなうだ。もしあれを放たれたらこの町は大変なことになる。

ハンス社長は砲撃用意が完了した合図として撤退勧告の信号弾を放った。

「撤退のチャンスだ！」

「そうだ！あいつらのために逃げるんだ！俺たちのせいじゃない！」

「だが、ここは俺たちの街だぞ！」

「あんなものに俺たちの街を賭けろっていうのか!？」

発砲音がなった。

総隊長が現在の喧騒を納めるべく拳銃を空に向けて放ったのだ。

「今の我々の戦力では奴に太刀打ちすることは出来ん。一度体勢を立て直すのだ。そして、あの兵器に賭けてみるのだ。」

「総隊長……」

「それしか道はない！総員一時退却だ！信号弾は私が放つ！」

総隊長の迅速な指示により退却の体制が整い退却が完了した。

彼等は道を守るかのごとく退却していった。我々への配慮だと思いたい。今は不要な詮索は捨て去り、作業に集中するべきだ。

望遠鏡を再設計して開発したスコープが拘束弾によって動きを封じられているシエンガオレンを捉えている。この時のために何発もの試射をかさねていた。砲撃をはずした際のリスクが極めて大きいことはこの兵器の欠点のひとつだがハンス氏は確信している。彼等が砲撃をはずすことは万が一にもないと。

「全砲発射！」

「撃てーっ！」

英雄の槍の穂先は大きな火を吹き、同時に3mほどあるディアブロスの剛角を中心とした素材で作られた砲弾が発射された。

まるで撃龍槍のような大きさの砲弾が風を切りシエンガオレンの脚部に突っ込んで



いった。

ゲイボルグによる砲撃はシエンガオレンの脚を複数まとめて粉碎し、シエンガオレンを横転させた。

当然そんな状況で強酸を発射できるはずもなかった。

「やったぞー！」

国防隊は歓喜したが、ハンス氏の表情は険しいままだった。すでにシエンガオレンは満身創痍となつてているが未だ健在であることも事実だ。シエンガオレンを仕留めきれなかった事実はハンス氏の顔をしかめさせる。剛弾を放ったゲイボルグの砲身は所々が焼けついており、そのままでは再発射は困難だ。

その攻撃がシエンガオレンを怒らせて、シエンガオレンは残された脚そして前脚を使つてどうにか立ち上がり進路方向をこちらに変更してきた。

ここまでくるのにはそう長くはないだろう。

先ほどハンス氏が険しい表情のままだったのはこれを見越してのことだろう。

退却が当然の判断とも言えるが、誰一人として退却する様子はみられない。

「総員、威力が落ちた一発だけでも構わん！ 砲弾と砲台を再び組み合わせるゲイボルグの再発射にかかれ！」

ハンス氏は思いがけない指示をした。

「あれはもともと使い捨ての兵器でしょう!?!それを今から組み直し、再発射なんて無茶です!」

「黙れ!私も、同胞達もこの時のために生きてきた!君に口出しする資格はない!この時を逃したらあの時命を失った同胞に顔向けが出来ない!私達には最初からこの機をもつて約束を遂げる覚悟を決めているのだ!それに!」

「ですが今は、街の住民避難と退避のために行動することが優先です!これ以上の戦闘は:..」

思わずハンス氏の話を遮った。それほどまでに私は感情的になっていた。

「これは私達だけの問題ではない!奴を食い止めなければ奴の進路方向にあるあの町村を故郷としている人々が故郷を喪うことになるのだぞ!それを防ぐべくなんとしても奴をここで仕留めないとどれだけの人命が喪われるか!私は奴によって誰かが第2・第3の私になるのをなんとしてでも防がなければならぬのだ!」

私はハンス氏の言葉に反論できなかつた。

彼の信念を誰が否定できるだろうか。

「:.. わかりました!出来る限り、いえ、必ず組み直しましょう!」

「ありがたい!」

私達は一心不乱に残された4番砲台の再調整に取り組んだ。

防衛に向かったハンターや兵隊の懸命の活躍により、シエンガオレンは脚をたじろかせている。しがらみも体裁も関係ない。今はただ、目の前の脅威であるシエンガオレンを退けるだけだ。残された時間は少ない。間に合うのかという不安を捨て去り一心不乱に作業に取り組んだ。

双方の懸命の努力の結果、急造の砲台を発射する用意を完了させた。急いで装填を行う。

「ゲイボルグの整備は完了した。一発あれば十分だ！君は私の同胞達の退避誘導を頼む！」

「ですが、火器管制はどうするんですか？直接操作したら貴方の命に関わるほどの反動による衝撃が……」

「君に言われなくともわかっている！大砲の時代の幕引きを私にやらせてくれ。」

私に鍵を投げつけた。

「君は私を見殺しにしたのではない。私の願いを聞き入れてくれたのだ。ありがとう。その鍵は私の私室の金庫の鍵だ。その中に妻子の思い出の品とザワークラウトのレシピが書いてある。作ってみてくれ。」

過ぎ去り際に微笑みながら言った。

シエンガオレンはすぐそこにいる。

「約束を今度こそ果たして見せる！くらえ！シエンガオレン！」

急遽組み直したゲイボルグによる至近距離からの第2の砲撃によって飛び出た砲弾は一度きりの砲撃にして最後の一撃となった。至近距離から放たれた砲弾は露出されたシエンガオレンの弱点に着弾した。内臓がつまったシエンガオレンの弱点は外殻もラオシャンロンの頭骨も貫通するゲイボルグの砲弾が突き刺さり爆発した。内臓が集中している弱点を破壊されてシエンガオレンはその場に崩れ去った。私達は飛び散ってくるシエンガオレンの破片や内臓そして倒れてくるシエンガオレンそのものから回避するので精一杯だった。私はハンス氏を担架にのせて急いでその場から走った。

シエンガオレンの侵入は阻止された。ゲイボルグによってこの町は救われたのである。

だが、歓声はなかった。私も喜びではない感情で押し潰されそうになった。

我々に影口を言っていた国防軍隊の隊員達が私に歩み寄ってきた。

「なあ、あんた。あんた達のおかげで俺たちは生き残れたよ。あんた達が頑張って作ったあの大砲の砲撃がなければ俺たちの街はなくなってたよ。だからさつき俺たちが言ったことは取り消させてくれよ。」

「すまねえ。俺たちは大口叩いていたくせになにも出来きなかった。」

「あなた方のお陰で私たちの街は救われた。礼を言わせてくれ。」

防衛隊総隊長は礼を言った。

「聞きましたか？ ハンスさん？」

「耳にしたとも。君にいわれるまでもなくゲフツ！」

彼は吐血した。

「失礼したな。内臓をやられたようだ。」

「ここで死んでは行けません！ しっかりしてください！ 死んでは行けません！」

私の訴えを聞いたハンス氏の表情は微笑んでいた。

「ありがとう。ゲオルグ。」

「みてくれていたか？ お父さんの大砲はあの蟹を倒したぞ。約束は果たしたぞ……。」

それがハンス氏の最後の言葉だった。

ハンス氏の遺体は妻子のとなり埋葬されることとなった。それがハンス氏の希望だったからだ。

「あの人の思いをしつかりとギルドに伝えておいてくれよな。」

副会長が私に言った。

「勿論です……あなた達の奮闘を後世に伝えます！」